

我が国周辺水域資源評価等推進委託事業

資源動向調査（クマエビ）

吉岡拓也・住友寿明

資源動向調査では、資源管理指針対象魚種、広域重要魚種、栽培対象魚種について、漁業と資源の現状、資源回復に関する管理施策、種苗放流による効果等の調査を実施する。徳島県はクマエビを担当し、資源動向調査を実施した。

方 法

紀伊水道、播磨灘海域におけるクマエビの漁獲について、漁獲集計システムを導入している9漁協の小型底曳き網の漁獲データをまとめた。漁獲物の全量を漁協へ水揚げし、全船がほぼ同時期に同じ漁具を使ってクマエビを狙う代表1漁協の漁獲量、CPUE（kg/日・隻）から資源動向を把握した。

結 果

平成17～28年の漁獲量を海域別で比較すると、漁獲量の99%が紀伊水道、1%が播磨灘に位置する漁協で水揚げされている（図1）。紀伊水道におけるクマエビの主要な漁法は小型底びき網であり、徳島県におけるクマエビの資源動向は、A漁協の小型底びき網の漁獲データを解析して得た。平成24年以降の主漁期（1～3月および10～12月）のCPUEは10～25 kg/日・隻で推移し、平成28年は前年比162%の17 kg/日・隻だった（図2）。

考 察

資源状態

小型底びき網の漁獲量とCPUE（kg/日・隻）を指標に、徳島県におけるクマエビの資源水準および資源動向を推定した。小型底びき網の平成28年10～12月のCPUE（kg/日・隻）は前年比199%、漁獲量は前年比166%であった。平成17年以降の漁獲量において、最高値と最低値の間を3等分し水準を判断すると資源動向は中位（図1）、過去5年の主漁期CPUE（kg/日・隻）の経年変化より資源動向は横ばいであると推測される（図2）。

資源管理の方法

現在、資源動向は「横ばい」であるが、今後顕著な減少傾

向を示した場合には、紀伊水道の同じ漁場で操業する和歌山県と連携を図り、適切な資源管理方策の策定が必要である。また、クマエビは「漁業・養殖生産統計年報」の集計対象外であるため、資源水準や資源動向を的確に把握するためにも主要生産地の漁獲データおよび関連情報を引き続き収集することが必要である。

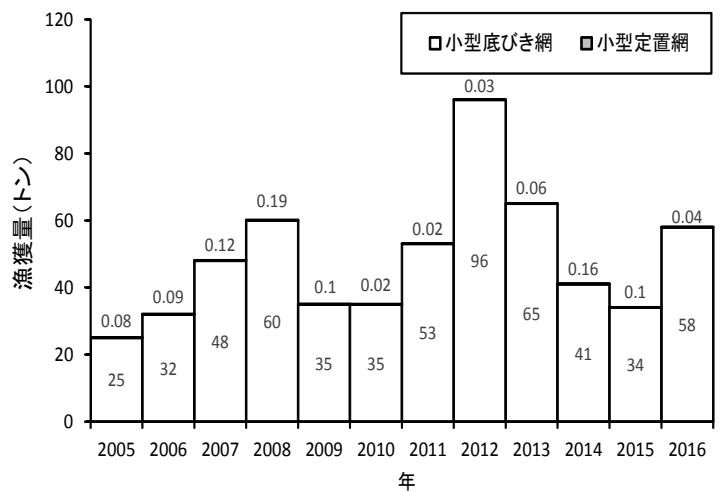


図1. 海域別漁獲量の経年変化

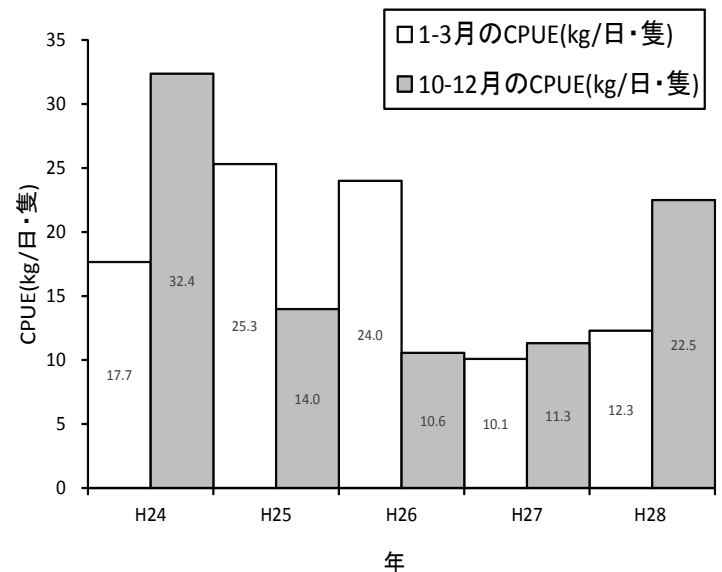


図2. 小型底引き網によるCPUE (kg/日・隻) の経年変化

